

鈴木孝平 SUZUKI Kohei

Colors of KCUA 2014 INVITATION-浮遊する意識-

鈴木孝平インタビュー

——今回の展覧会テーマについてどう思われますか？

今回の展示では、わたしの視点を通して見た世界の一部を提示することになると思います。その視点に他者を招き、世界の片鱗を共有しようと試みるなかで、結果的にわたしが世界に招かれていたという認識にいたるような気がしています。

——現在、制作をするにあたり、影響を受けたものは何ですか？

シュルレアリスム、パンク・ロック、寺山修司の活動、ジョナス・メカスの言葉

——制作を始めた、芸大に入ったきっかけを教えてください

義務教育の「美術」への嫌悪と、映画監督への憧れ(当時18歳) 芸大に入ったきっかけ→アートの専門教育を受けてみたかったのだ。

——今後の展望を教えてください

(制作活動に限らず) 幸せになりたいと思います

——「そう見えている世界」とはどのような意味ですか。視覚的な意味でしょうか。

「そう見えている世界」というのは視覚的な意味で使っていました。ですが、事象によってわたしが「そのように感じさせられている現象」というほうが適切かもしれません。端的に言えば、「無意識の見立て」を「している」(させられている?)のだとおもいます。これはつまり、わたしから事象をなにか別のものに見立てるというよりかは、事象がこちらに見立てを強要してくるような感覚であり、なんでもない、ありふれた物体が、まるでこちらに対して「わたしを見いだしなさい」と語りかけてくるようなものです。

たとえば、この展覧会に出品予定の作品のひとつに、屋外でビニール袋を追い続ける映像作品があります。わたしがロンドンの留学中に住んでいたアパートは8階でした。ある日、部屋の窓か

ら白い物体が地上25mほどの高さで漂っているのがみえて、はじめは鳥かなとおもいましたが、よく見るとそれはビニール袋であり、なおかつ非常に優雅なものでした。それはかつて見たことのないビニール袋の「表情」でした。

この経験から、無生物とされているものに人格を見いだすことを試みる/みさせられるようになりました。この映像は、そのような多様なビニール袋の側面の一部を記録してみるという作品になる予定です。

——鈴木さんにとっての幸せとはどのようなものでしょうか？

いまのわたしにとっての幸せとは、両親が死ぬときに、彼らが自分の人生は間違っていなかったとおもってもらうことです。

——鈴木さんの作品の中で作品タイトルとのダジャレ等のギャグやパフォーマンス、BGMの使用などいくつか共通した特徴が見受けられますが、なぜそうした手法を取っておられるか、理由があれば教えてください。

ユーモアは人生を生きやすくする要素の一つであると考えているからです。

——結婚されましたが、それについて自身の制作について何か変化はありましたか。

結婚してまだまもないので、特にありません。これから変化するのかもしれませんが。

——学部のお話で「映画監督への憧れ」とありましたが、そのような願望はいまもありますか。

当時、映画の才能があるような人は何人か周りにいたような気がします。ですが、アーティストとしてやっていけそうな人はいなかったもので、わたしはアーティストのほうでいこうと決意して以来、映画監督になりたいとはおもっていません。

——お客様に一言おねがいします

どうか幸せになってください。